

登校拒否に関する研究 (第II報)*

—「タテ関係からヨコ関係への発達における挫折」としての登校拒否—

池田博和 桐山雅子¹⁾ 平石賢二²⁾
石川雅健¹⁾ 長谷川博一³⁾ 辻井正次⁴⁾
川瀬正裕¹⁾ 加藤礼子⁵⁾ 東浦昇子⁶⁾

I. はじめに

われわれは、かつての研究および調査(池田ほか, 1979, 1980, 1985, 1987)の結果から、登校拒否の本質論と治療論に関していくつかの示唆と展望を得ることができたが、本報告の目的は、それらについて総括し、若干の事例を通して検討を加えることにある。中でも、登校拒否とは、「青年期危機」一般を特徴づける「<共通感覚>獲得不全」にかかわる問題化のひとつの結果であり、とりわけ親子関係に代表される「タテ関係」から友達や社会との「ヨコ関係」へと参加していかなければならないという発達課題の前で挫折した姿であるという視点を明確化することに主眼がある。

われわれは以前の研究(池田ほか, 1987)において、今後への展望として大体、次のようなことを述べておいた。すなわち、まず登校拒否において根本的に問題になっているのは、自己成立の自明性を構成する「共通感覚」(common sense)の一面としての「Auchsein」感覚、すなわち、自分というものは人と決定的に違った特殊な存在なのではなくて、自分も他者も「やはりまた同じ存在」なのだという感覚、の獲得にかかわる事柄ではないかと考えられる。この感覚が他者一般と出会うこと、人の立場に身をおきうることを保証するのであり、その明白な発達は青年期に示されるが、この感覚は誕生以来

の人間関係の中で形成される。その最初の大きな「試練」は学童期まで遡る。つまり、その時期の遊び仲間との関係の中で、徒党を組んだり、別のグループと競争したり、いじめたりいじめられたりする経験から「皆と同じであること」の重要さが体験される。この感覚獲得がうまくいっていない場合には、この段階ですでに仲間への参加から退かざるを得なくなる。

やがて訪れる思春期は、意識に先行する急激な身体変化と性的成熟を前にして、少なからず当惑を覚えると同時に、自己の内面的世界に目が向けられる時期であるが、それは自己の個別性や独自性に覚醒する契機ともなり、また自分だけが人と違った、浮き上がった、特別な存在として絶望的な孤独感に陥りうる危険を蔵した時期ともなる。いいかえれば、健全な自己の個別性、単一性、独自性、一回性の感覚の獲得は、「根本的には皆と同じ」という感覚を基礎にしてはじめて成立しうるものである。つまり、青年期の危機的な時期を乗りきりうるかどうかには、それ以前の段階における「Auchsein」感覚の獲得の程度が対応している。不幸にして、これがうまくいかない時には、孤立化して仲間や世間の中に参加できなくなる。前報告の調査における登校拒否の誘因を見ても、友人とのトラブル、なじめなさをもっとも多くを占めている。Auchsein 感覚、ないしは共通感覚とは、生活世界の自明性を構成する一契機であるが、それは「誰にとっても」という他者一般、社会一般への意味方向が強調されている点で、空間的には水平軸として表象されうる。それゆえ、われわれはこれを、簡単に「ヨコの関係」と呼んだのであるが、同じように共通感覚獲得不全が問題になる青年期危機一般の中でもとくに、このようなヨコの、友達、仲間、親友、学校、社会一般との、関係の中に参入していかなければならないという発達課題の様々な段階で挫折し、退避したありようこそを登校拒否として特徴づけることができる。以上のように捉えることは、登校拒否の多様な発症年齢を包括する説明原

* 本報告の概要は、日本教育心理学会第30回総会(1988)において発表された。

- 1) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生
- 2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)
- 3) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)
(現所属 東海女子大学文学部)
- 4) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(前期課程)
- 5) トライデント カレッジ(元心理教育相談室)
- 6) 名古屋大学教育学部研究生

理となるのであり、同時にまた、ひとつの治療論的展望を得ることにもなるのである。

以上の視点について、以下、事例に即して検討していくことにしたい。

Ⅱ. 青年期へのプレリュード

事例1：正男 小学校4年生。

1. 事例の概要

これはすでに「臨床青年心理学研究会」の共同研究者、間宮（田畑ほか、1979）の発表している事例であるが、われわれの視点にとってきわめて重要であるので、間宮の了承を得て再び簡単に紹介することにしたい。詳細は原典を参照いただければさいわいである。なお、原典ではJ男君として叙述されているが、ここでは仮に正男君と命名した。

正男は3年生の秋頃から発熱、腹痛が頻繁となり、学校を休みがちとなった。父親（43歳）は大手企業に勤務する「しっかりしたいいいお父さん」であり、母親（40歳）は多少過保護的と自己評価する、いかにも良妻賢母型の、けじめをはっきりさせる、やはりしっかりした女性である。面接の印象では、母親にはとくに神経症的傾向や偏った養育態度は感じられなかった。

病院での半年にわたる診察、検査にもかかわらず、身体医学的原因是全く見い出せなかったため、心理面接に回されてきたが、そこではじめて、「いじめられるから行きたくない」という事情が明らかとなった。クラスに「悪がきグループ」があって、悪男君が大将である。悪男の家はスーパーマーケットを経営していて、両親は大変に忙しい。クラスのほとんどの男子は悪男の支配下に組み込まれ、担任の新卒女教師に対する悪戯をはじめ、数々の蛮行がなされていた。正男はあの聡明な母親の子供らしく、「悪男君たちは悪いことをしています。悪いことは悪いことです」ときっぱりとした態度で、悪い連中の仲間に入ることを潔しとしなかったのだが、そのため、皆からいじめられ、孤立無援の戦いをしていたのだ。悪男の指示のもとにいじめはくりかえし周到になされていた。正男は悪罵と嘲笑を投げかけられ、掃除道具でたたかれ、毛虫をくっつけられ、小便をかけられ、下校時には待ち伏せしてやっつけられた。彼は涙を落さんばかりに「もう学校をかわるかクラスをかわりたいということだけです」とくやしそうに語った。治療者は彼の言葉に耳を傾け、共感し、励ました。

すぐに治療者は校長と担任あてに学級集団の調整を依頼する所見書を送った。これに応じて、学校ぐるみで問題解決に当たり、担任が悪男の家庭調整を行って、母親が家庭にいるようになると、悪男はおとなしくなり、グ

ループは解消し、学級が平和になって正男の症状もうそのように消えたのだった。もともと学校もこの問題に苦慮していたのと、ほかの父母たちも問題の大きさを知って協力したので早い解決ができたのだった。

それから半年ほどの後、また母親からの相談があった。正男の家庭内金銭持ち出しに関する問題で、あの事件以来、喜ばしくも親友ができ、それはかねて心ならずも悪童グループに属しながら正男の態度に敬服していた学級委員長で、その子との親交のために使っているらしいが、どうしたものかということであった。治療者の伝えたことは、「相談のケースとはせずに、家庭のしつけ、ないしは愛と規律の事柄として独自に対処しておいていただきたい」というものであった。

2. 考 察

以下、間宮の考察をふまえ、われわれの立場からの検討を加えたい。

Blos, P. (1962) は、人はおよそ10歳頃から前思春期に入るとみて、「男性にとって潜在期〔少年期〕の終了は前性器性〔幼児性欲〕の再生によって特徴づけられる。この時期には、少年は（落ち着きのなさ、そわそわすることなど）運動性が増強し、口愛的貧欲、加虐的行為、肛門期的行為（糞便嗜愛的快感、「汚い」言葉への関心、清潔さをなおざりにすること、「臭い」ことの魅力、擬声的な騒音をうまく作り出すこと）、そして男根的、露出症的遊びの増強を示す」という。青年期を前にしてたかまってくる衝動と緊張が退行的な姿勢をとらせるのであり、また、gang age の現象として知られる共犯的同性集団への帰属は、「去勢不安に対する同性愛的な防衛」という意味をもつものとなる。こうして悪童たちは正男に物心両面からありとあらゆる「汚い」ものを浴びせてきた。このところに、「いじめ」問題、およびこの段階での登校拒否のひとつの誘因に関する発達心理学的背景がある。この点を親や教師は十分理解しなければならない。

しかし、今日、この少年の残酷さが、単に発達途上の一現象というだけでは済まされなくなってきているのは、陰湿さ、残酷さがエスカレートしているばかりでなく、前思春期を越えて、中学、高校の段階にまで遷延化していることである。たとえば今の少年マンガ雑誌の主題には、上の意味での前青年期的特徴の反映されたものが多いように見うけられるが、それを小学生から大学生がこぞって読んでいるのである。この点、精神的成熟の発達位相に関しては、いわばエントロピーが増大しているということになる。

Sullivan, H. S. (1955) は、小学校入学から chum

を見つめるまでを「少年期」として、この時期には、他の子供との交わりへの要求が自尊心を損なうことなく達成されること、「皆と同じである」ことを経験することが重要であるとしている。playmates をもてない子供、集団への結束や集団での競争に組みしえない子供は、「ostracism」(追放, Sullivan, 1953) の対象になってしまうのだという。こうして黒白のけじめをはっきりつける母親の価値観の支配下で、暴力的な悪童グループに結束しえなかった正男は、半年以上にわたって ostracism の犠牲者として孤独と苦痛にさいなまされることになったのだ。さいわいにして学級改革の結果、問題が解決し、その後、成立した親友への親密さの要求は、母親への反逆、罪を犯すことさえ恐れぬ強烈なものとなった。自己中心的感情から独立して「自分以外の誰かのことが自分自身と同じほど大事なものとなり始める」という前青年期の段階に移行したこの少年の心はもはや、愛と理性に満ちた母性行動によってさえも、そのすべてを惹くことはできなくなっていた。「良いことはよいことで、悪いことは悪いことです」といっていたあの正男が、その価値観の源泉である当の母親から盗みを働くようになったのである。この盗みという悪の行為も、母親からの心理的自立に際して、影の面を選択したものと見ることができる。単純で一面的な所与の、いわば絶対的に規定された、即自的なありようから、自主的な経験と選択にもとづいた相対的、対自的ありようへと、簡潔にいかえれば、親子のタテの関係から、友人とのヨコの関係へと、価値ないし行動の重点が移行したのである。それゆえに、間宮は正男をもうケースとしては扱わなかったのだ。こうして正男は青年期への門経を一挙に駆け抜けていったのである。

ここで、少し長くはなるが、Sullivan (1955) のいう具体的な言葉を眺めてみよう。彼は児童期について次のように述べている。

児童期 (the juvenile era) に入るとともにひとは生き方を分かち合うような仲間 (compeers) を強くもとめるようになる。(原典 p.37)

仲間を求める気持が熟するとともに小児期は終わる。子供はもう、権威的な大人に支配され、擬人化された愛玩動物や玩具などに取り巻かれた環境では満足しなくなる。そして〈自分に似ていることが重要であるような人間から成る環境〉にうつろうという気持ちを起す。遊び友達が手近にいる場合には、その子たちとかかわり合うことが新たな深い意義をもつようになる。遊び相手のいない場合には、子供

の心の中にある〈夢想という過程〉が動き出して架空の遊び相手を創り出す。自分以外の人間の人格と協調しつつ物事をなしとげてゆくことが共同作業であるが、いずれにせよ、この共同作業をめざす新しい心理的傾向に促されてその力によって小児は児童期という新たな人格発展段階に進み入るのである。自分以外の子供と遊ぶ能力が芽ばえてゆくにつれて、競争と妥協という仕事を学習する過程が進行する。

われわれの属する文化において学校は〈児童期において経験を積むための新たな大練習場〉である。もしこれまで両親が然るべく賢明なひとであったならば、何らかの形で子供は学校で出くわすことへの心の準備がすでにできているものである。もしそうでない場合には子供は大変つらい目に遭いがちである。なぜならその子の仲間たちはまだ同情や寛容〔という美德〕を身につけるに至っていないからである。それどころか仲間たちは自分の問題でせい一杯であり、新しい欲求不満や屈辱感を山ほどかかえている。だから泣いたり暴れたりママに言いつけたり、などという、幼児期から持ち込んだ魔法は引き目がなく、そのような手段に訴えるような児童は気の毒なことに手荒らな扱いをうけてしまう。(p.38~39)

この学校という場における教師と生徒の間の対人的な諸要素は、人格発達上好ましい働きをすることも、好ましくない働きをすることもある。……粗野で残忍な教師は……子供に……苦痛と屈辱をくり返して与えて、しだいにその子に、その子が転入してきたこの世界は非友好的で残酷な世界であるということをおしやぶるかもしれないのであって、そのような教師はその子の心の中に、どうみてもただ年長になったというだけの理由で不幸にも追放された、家庭〔という楽園〕のなかに戻ることを目的とする、夢想の過程を発足させることになるかもしれない。……

この退行的な指向性は非常な害がある。発達の完了には程遠い時点で起るからである。児童期は、それなりの限界はあるが人格に今までよりも個別化された社会化が始まる時期であり、まさにその矢先にこのような激しい逆流、このような強烈な挫折、このような満足からの遮断、このような安全の空洞化が起るならば、子供の心の眼は過去を振り向き、子供は未来をよける方法をさがしたり、仲間と共に生きるすべを教えるような体験から逃避する途をもとめたりするようになる。(p.40)

学校の職員との接触のほかに、他の子供や餓鬼大将などと分かちあう〈遊び場というかわり合いの場〉がある。……また学校という場には〔みえない〕裏側がある。学校の出来事の噂に対する家庭の反応がそれである。これも善悪両様の作用がありうる。さらにまた児童の仲間に対する家庭の態度がある。仲間は今や人格の発達上非常に重要な意味を持つようになった他者である〔から、これに対する家庭の態度もまた重視せねばならない〕。(p.41)

以上はもちろん登校拒否についての説明ではないけれども、その心理的背景を解説して余りあるといわなければならない。それらは従来のいわゆる「分離不安」説に通じるものであるけれども、その因果連関の重点は分離不安説とむしろ逆転している。すなわち母子の分離不安が仲間関係への参入を阻害しているというよりは、「似ていること」が重要である「仲間」への参入挫折が「家庭の楽園」という退行的夢想へとおとし入れるのである。真実は、上の両者の不可分の相互連関のうちに存しているのではあろうが、このような視点はとくに登校拒否の原因論よりはむしろ誘因的事態を考えるのに非常に示唆的である。少年たちはある仲間のうちに具体的、感覚的、行動的な微妙な差異をそれこそ嗅覚的に感じとるや否や、彼をいじめるか登校拒否のスケープゴートに追いやるのである。「だって皆んな〜だもん」という彼らの言葉に論理的に反駁することはたやすいけれども、「皆と同じ」ことがこの時期これほど重要な意味をもつことを認められる親や教師はどれだけいることであろうか。

前青春期のありようについても続けて Sullivan (1955) の言葉を引用してみよう。周知のように彼はこの段階をきわめて重要視している。

われわれの属する文化においては8歳半ないし9歳から11歳までの年齢の頃に、かつて私が〈前青春期の静かな奇蹟〉(the quiet miracle of preadolescence)と呼んだことのある事態が起る。……私があえて前青春期の「奇蹟」と呼ぶのは、誕生以来——いや受胎以来とってさえよいだろうが——初めて、〈伝統的表現を用いれば自己中心性といわれるもの〉から離れて〈完全に社会的である状態〉へと向う運動が起っているからである。(p.41)

……児童であることが終り、〈前青春期の人間〉(preadolescent)となったという標識は愛の能力の初期の形態が現れることである。……愛とは、ある他者、ある特定の相手が体験する満足と安全とが

自分にとって自分自身の満足と安全と同等の重要性を持つようになりはじめる、ということである。

愛と総称される、この感情的な関係は通常限られた場合においてしか起らない。愛は、その始まりの時点では多くの要素が揃っていなければならない。たとえばよく似ていることが一目でわかるとか、同一方向に衝動をもっているとか、身体発育が平行しているなどである。これらの要因によってつくられる対人的な場においては、当然少年は少年を相手とする方が少女を相手とするよりも寛ぎを感じるはずである。この〈同類だという感じ〉すなわち同一視(indentification)が、前青春期的変化をこうむりつつある者の感じ方を左右する。愛の能力が現れる、そのはじめは同性を対象とするのが普通である。少年の〈親友〉(chum)はやはり少年であり、少女の〈親友〉はやはり少女である。〈親友〉ができる、象徴や象徴操作、人生や世界に関する情報やデータをお互いに照合し確かめあうことになるので、いわば愛のひきおこす波にのって〈共人間的有効妥当性確認〉の行為が頻繁に営まれるようになる。(p.43)

現実の世界が一つの共同体であることに気づくのもこの時期からである。自分の精神、思想、人格などという、そもそも非常に自閉的な、しかしそれなりに有効妥当な構造をもっているものが、〔実は閉ざされたものではなくて〕、その音調を比較し、他と相互に検討しあうことのできるものであろうことに気づくようになると、その人はいままで感じたことがなかったような意味で自分が人間であることを実感するようになる。その人は〈共通の人間性〉が他の人々の中に存していることを認めることができるようになった点で、いままでよりも〈全幅的に人間〉となる。(p.44)

前青年期になると、「似ていること」「同類であること」が、さらに重要な意味をもつようになる。ここで注目したいのは、chum 形成の契機となっている「likeness」「feeling of species identity」「identification」「共人間的有効妥当性確認、consensual validation」「共通の人間性、the common humanity」等々の用語である。これらが指し示しているのは、われわれが問題にしようとしているのと同じ事態なのではないだろうか。つまり、さきにわれわれは「登校拒否において根本的に問題とされるのは、自己成立の自明性を構成する〈共通感覚、common sense〉の一面としての〈Auchsein〉感

覚、すなわち、自分も他者も基本的には<やはりまた同じ存在>なのだという感覚、の獲得にかかわる事柄ではないかと考える」と述べたが、この common sense, Auchsein 感覚がこの時期、仲間との交流達成の重要な媒介となるのだといいかえてもよいであろう。事実、consensual とは「共通感覚的」ということに他ならない。それは、すでに形成されてきたその試練の時でもあり、また新たに経験され再構成される機会ともなる。

登校拒否とは、この精神的発達課題において挫折し、社会的状況から退避した状態であるということができよう。このことは、とりわけ、児童期には playmates との、前青年期には chum との、いずれにしても「友人とのトラブル」が、登校拒否のもっとも大きな誘因、すなわち発症のきっかけとなっていることの説明ともなるであろう。

Ⅲ. 生活史におけるタテ関係の呪縛

事例 2：真一 16歳 高校 2 年で中退

1. 事例の概要

桐山が母親面接を行っているケースである。本人は来所していない。「不登校や暴力といった行動次元での反応以外には、明瞭な神経症的、精神病的な症状化をあまりとることなく、慢性的に非社会的な生活様式と両面的な人間関係のうちで何年も経過する」ような、われわれが中核群と考えるタイプの事例である。真一は高校 2 年の初夏、「高校のレベルが低い、新校舎の塗料のにおいと冷房が嫌でたまらない、それゆえ転校したいが、できないので高校をやめて、大学入学資格検定試験を受ける」という理由から学校を休みだした。父親は証券会社に勤める猛烈社員で帰宅はいつも深夜 1・2 時、転勤も多かった。家族はこの父親の実母を中心に構成されている。このしっかり者の祖母は人づきあいが嫌いで、終日、自室で新聞などを読んで過ごしているような、「人の気持ちのわからない」人である。母親は昔風の真面目な家庭に育ち、理ずめで納得して行動するタイプで、姑に仕える中での辛い想いを漏らしたことは家族の中でさえ一度もない。真一の乳幼児期は祖母中心の生活だった。入浴の順番も決まっており、まず父親、次に祖母、最後に母親と真一だったため、彼は熟睡したところを起こされて入浴するのが常だったという。幼稚園の時、すでに不適応で休んだり、落ち着きがないといわれたり、ぜんそくが出たりして、母子関係に問題のあることをにおわせている。中学で、真一はバスケット部に入ったが、2 年の春、肩の骨を折り、退部。この頃から友人関係からの徹退が徐々に始まった。県立高校に入るという密かな野望だけに支えられて、彼は残りの中学生を送っていたが、中

3 の 9 月、思いがけない父親の転勤によってそれも不可能となる。進学熱の盛んな新しい学校には、受験勉強の最中にやってきた彼を受け入れてくれる友達もなく、ひとりストープの前にうずくまる日々が続いた。公立高校は無理と言われ、希望に添わない私立校に進み、彼はクラス一番の成績を取る。彼は「ここは自分のレベルではない」といって、一流高校への転校を希望したが、それが不可能と知って、登校拒否になったのであった。彼の中には、いい会社に入るためにはいい大学に入らなければならない、そのためにはいい高校に入らなければならないという当為のみが主に祖母との関係の中で形成されていた。それゆえ、一流高校でなければ、彼にとって通学する意味はまったくなかったのである。母親もまた、祖母とのタテの関係の中で生きてきた人であった。

2. 面接経過

本報告の目的は、登校拒否の発症のメカニズムについて検討することにあるので、ここでは、高校中退後の真一と母親鈴枝の様子を報告するにとどめたい。なおこの事例は現在も継続中である。

[第 I 期] 母親への攻撃と身体不調の時期 (約 1 年)

この期は鈴枝の対応の一つ一つが真一の気にさわり、母親と祖母への攻撃がひどくなっていった時期である。鈴枝の対応がまずく、真一は常にいらいらし、鈴枝に罵声を浴びせかける。鈴枝は反論しながらも、真一の様子におどおどし、不安で、こんなはずではなかったと情けなく思っている。真一にとっては、言葉による acting out の時期である。真一は腹痛、便秘、腰痛を訴えるが、決して病院へ行こうとしない。祖母は病気で自室にこもったままで、真一との直接の関係はない。忙しい父親は、家のことはこれまでどおり鈴枝に任せたままであるが、そのことについて鈴枝に特別の不満はない。

「おまえのせいだ。」「おまえのやり方の結果が僕なんだから、おまえのやり方が間違ってる。」鈴枝はそう言われる理由がわからない。納得できれば、態度を変えることもできると思い、「どうということなの。教えて」と聞き返すが、「言わんでもわかってるだろ。自分で考えろ」という返事しか戻ってこない。「親子だからわかってくれると思っていた」と言いだした鈴枝に、真一は「対等じゃないんだよ。俺、子供なんだ」と叫ぶ。長男だし、真一には期待が大きかった。いつも歯がゆい気持ちで接してきた。真一の言うとおりに、確かに姑だけに気を遣ってきて、子供がかわいそうと思わないわけではなかったが、それも教育だと思ってきたと面接室の中でつぶやき出した母親に、真一は真一のように真一の突っかかりが少なく

なってくる。真一は「何のために学校を辞めたかわからんようになってしまったなあ」と言ったりする。

[第Ⅱ期] 一応の安定と時々の突っかかきの時期 (約2年)

祖母の心臓発作による入院、親戚間の駆引き、祖母の別居と突然の死、葬儀後の雑事、時を同じくして父親の単身赴任、念願の家を買って社宅よりの引越し。この2年間は鈴枝にとっても真一にとっても、外側の動きに振り回される時期であった。真一はほとんど外へ出ないが、外出できないわけではない。テレビの時代劇を好むようになり、少しは勉強もする。腹痛、便秘、臭いや手を洗うことへのこだわり以外に、はっきりした症状を出せていない。第Ⅰ期の鈴枝の真一に対する認識の変化、と言っても鈴枝にとっては知的理解の枠を出ないものであるが、によって鈴枝は息子への対応を変えていった。それ故、真一も以前のように激しく突っかかたり、いらだったりしなくなった。しかし、真一にしてみれば、まだ何か足りないという気持であろうか、「お母さんが変わらなければ僕は変わらないよ」と言う。鈴枝は「これだけ変わってきたのにこの上、何を変えればいいのか」と反論する。母親の対応が時にプラス、時にマイナスに働き、一応の落ち着きはみせたものの、真一に特別な変化はみられなかった。

真一の希望が難しく、なかなか決まらなかった家がやっと決まり、引っ越しになる。続いて祖母のあっけない死。真一が突っかかる材料が一つずつ無くなっていくと同時に、腹痛と便秘の訴えが頻繁になる。以前から長かった入浴時間が3時間になり、手を洗うのに30分かかるといった、強迫的行動も目立ってくる。「おまえは心配しているだけで、ちっとも努力していない」「形だけやってるだけで、本心は自分の教育は間違っていないと思っている!」と、時々だが、真一の攻撃は厳しい。鈴枝は言葉通りに受け取り、言葉の背後に見えかくれする真一の感情を受けとめることができない。親子とも、右か左か、マルかバツかと言う思考になっていってしまうので、二人が望んでいるような、より積極的な会話ができない。

[第Ⅲ期] 母と子の和やかな会話の時期(約1年)

3回目の大検にのぞんだ後、真一の勉強時間は少なくとも、とうとう全く勉強をしなくなる。何年もの間、1日2食それもお腹が張るからということで小食であったのが、おやつを要求するようになり、そのうち3食になった。痩せこけていた頬のあたりが少しふっくらとしてきたという。「側に居れ」「お母さん世間話、話そうよ」と

真一は鈴枝を誘うようになる。鈴枝は初め、そんなたわいのない話につきあうのはばかりしいと思う。しかし次第に、そんな話をするのが真一にとって「心とむことらしい」と話の内容でなく、話をしている時の真一の感情に共感できるようになってくる。鈴枝がふと気が付くと真一は鼻歌を歌っていたり、お腹が痛い時には薬を飲んだりするようになる。第Ⅱ期とは違った穏やかさが、母子の中で感じられるようになったと鈴枝は言う。父親は週末に帰ってくると、「たまには外へ出ないと身体に悪い」とか「床屋へ行ってこい」とか言う。説教調になりやすい父親だが、日曜日、時には真一と話すようになる。「あれもだいぶ落ち着いてきた」というのが父親の感想である。

真一は以前より自分の部屋にこもるようになり、新聞を丹念に読んだりしているらしい。まだまだ外の世界に入っていく様子はないが、鈴枝は真一の今後の成長を信じているようであり、母親として関わっていく手ごたえをつかみつつあるようである。

3. 考 察

1) 学校からの退却

真一の登校拒否がはっきりしてきたのは、高校1年の秋であるが、ここにくるまでにはいくつかの段階が考えられる。順に追うと、まず仲間集団から、次に学校から、最後に社会から退却していったといえるであろう。小学校高学年から中1までの彼は運動部に所属し、彼なりに生き生きとした時代を過ごしていたようである。が、児童期の発達課題である仲間関係をたどると、親友を見つけれるところまではいっておらず、中2で退部した後は、登下校時に行動を共にする友人が居たぐらいで親しい友達は一人もできなかったらしい。このことから考えると、彼は、運動部という構造のしっかりした集団に所属することによって形の上では仲間集団に参加していたが、心理的には同年代の仲間集団に真に所属していたわけではなかったように思われる。部活動をやめたことによって、彼の本来の姿が現われてきたと見るのが妥当であろう。

次は、中学3年の秋の転校である。知り合いは全く居なくなり、学校では必要以外一切口をきかず、学校も休みがちになる。受験直前という受け入れ側の問題もあるが、真一側の要因も考慮しなければならぬ。彼の中には、いい会社に入るにはいい大学に入らねばならず、いい大学に入るにはいい高校へ入らねばならないという硬い図式が、小さい頃から、主に祖母との関係の中で出来上がっていたらしい。故に、彼の場合、仲間から退くことが即不登校につながらず、いい高校に入学するという目的のために、頑張って登校を続けた。この時期は仲間

集団からは完全に抜けてしまうが、学校からは退却しない段階といえよう。

最後は、希望に合わない私立高校に入学し、クラスで一番の成績をとった時である。彼は、僕のレベルはここではないから転校すると言い出す。大学に行けそうに無いレベルの高校に通う意味は、もともと彼には無い。転校をするためには1年生を終えなければならないと言われ、1年間は登校するが、2年生になって転校不可能なことがはっきりとしてくると、彼には高校へ通う意味が全く見つけられなくなってしまったのだろう。大験を受けると言って彼は高校を辞める。この時点で、彼は学校からも完全に退却し、その後徐々に社会全般からひきこもり、現在に至っている。「学校」は、社会人としての将来と現在をつなぐパスポートとしての機能を持つと同時に、親子関係に代表される「タテ関係」から、友達、仲間、社会という「ヨコ関係」へ進んでいく課題の練習場としての機能を持つ。彼には前者の機能だけしか考えられなかったらしい。

この一連の流れの源をもう少し探ってみると、「タテ関係」から「ヨコ関係」への移行期にあたる小学校4年時に、真一の家族は再び祖母と同居している。乳幼児期に母と子の絆がしっかり結べなかった点を、別居中に回復しつつあったものの、再同居によって母と子の基盤は再び不安定になった。「ヨコ関係」に入っていく際の不安を支える基地が家庭の中になかったために、真一は仲間関係に入る入口の所でつまづき、「タテ関係」にとどまってしまったのであろう。親からの心理的独立としての反抗期も、彼には全く無かったという。彼の登校拒否の原因は、根本的には仲間関係に参加することからの逃避であるが、いい学校へ入らなければならないという思いが、その発症を遅らせたと考えられる。

2) 3代にわたるタテ関係の優位性

祖母と両親、両親と真一、祖母と真一という目に見えない上下関係が強い家族である。祖父母は鹿児島の出で、かつての家長制の名残が濃厚である。8人の兄弟姉妹の5番目に生まれた長男を父親に持ち、親族全体の中でも跡取りとして生まれたという、構造的にも「タテ関係」に縛られた真一の位置がある。親の面倒は長男がみる、親は大切にするとする大儀名分のもとに、祖母の問題に真に取り組むことを避けてきた両親であり、その親族である。彼にとって大きなプレッシャーと感じられていたことであろう。

期待して育てられたにもかかわらず、というかそれ故に、彼は弟や従兄弟達と較べて、学力や積極性の点で、祖母や母親の期待に添えなかった。祖母は「真一は駄目

だわ」という言葉を、本人の前で常に口にしていたという。が、それにもかかわらず、真一は、良い孫であろうとし、聞き分けのよい息子であろうとしてきた。自分の存在を認めてもらうためには、家族の中で自分に期待されている「よい長男」役割をより忠実に果たすしか道はなかったのだろう。認められなければ認められないだけ、ますます彼は「タテ関係」に縛られていくことになった。

「おばあちゃんではなく、僕に関心を向けて欲しい」というのが、子どもの時からの真一の願いであった。しかし、一言の愚痴も言わず「おばあちゃんは大事にするものだ」というこの家のタテマエを実践している母親を前にしては、真一は自分の欲求を我慢し、よい子として背伸びするしかなかったのだろう。彼は、親族全体の硬い構造の中で、身動きできず、大きな圧力と無力感を感じており、そのためヨコの関係に出ていくことができなかったと思われる。言ってみれば、家族の中の持ち越し課題を背負わされてしまっていたのであろう。

3) 「共通感覚」獲得の失敗

真一は、漫画や「くだらない」テレビ番組に興味がなく、そういうものを軽蔑してきた。父親が出かける時は必ず玄関まで見送るといような面も持っている。この家ではそれらはしごく当然のことであり、真一は、両親や祖母の価値観をそのまま取り入れたものと考えられる。彼らに認めてもらいたい気持ちが奥にあるので、真一としてもこの「タテ関係」からなかなか自由になれなかったのだろう。

この家の、かなり固定的な価値観に縛られているために、友達と同じような興味を持ったり、仲間の価値観に同化することは、彼にはできなかったと思われる。洋服の趣味や髪型などの日常生活のごく些細なことで、同年代の若者の常識とズレていることに、母親の方が気づいて驚くことがある位なので、友人との間に「共通感覚」を獲得することは彼には非常に難しかったと思われる。彼は、仲間とのズレからくる不安をあえて「僕はみんなと違うんだ」という意識で受けとめ、自分自身を支えてきたようであった。それは彼が「この家の跡取りであるお前は皆と同じであってはいけない」という暗黙のメッセージを与えられつつ育てられてきたことと無縁ではないであろう。

感情を理性でコントロールし、本音でなくタテマエを前面に出して関わるのが、祖母にも、両親にも、真一にもみられるこの家族の特徴である。そのおかげでこの家族は、表面的には波風立わずにこれまでやって来られた。しかし、「わかりあう」といような、仲間とつきあうて行く上で大切な体験が真一には乏しかったと思われる。

つまり、親子という「タテ関係」から、やがて友達を作り、「ヨコ関係」に入っていく基盤となるような重要な何か、彼には育てられてこなかった。母親面接から考えると、それは、「言葉でなく気持ちでわかりあう」というような類のことらしい。母親との間で「わかりあう」体験を学習できなかったために、仲間と「わかりあう」所へ発展していかなかったのであろう。そのあたりが、ある程度育っている子どもが何らかの原因で不登校になる場合、親子関係とか、友人関係の中で子どもが少しずつ落ち着いてくると、友人や先生からの誘いかけなどのちょっとしたきっかけで子どもはきつい思いをしながらでも、学校へ戻ることがある。ところが真一のように内的準備が整わないままに、「ヨコ関係」を結ぶべき年齢を迎えてしまった場合は、単に学校状況からだけでなく、友人関係ひいては社会状況全体から退却してしまう。そして、周りの状況が変化し、彼を学校状況から退却させた直接の原因が無くなったり、彼がその原因を以前ほど気にしなくなっても、「ヨコ関係」にはなかなか踏み出せないのである。

IV. Auchsein の問題

事例3：竹男 14歳 中学3年生

1. 事例の概要

平石の担当したケースである。真面目で感受性が強い。表情がかたく、眉をひそめてしかめっ面をすることが多い。無口でしかも小声でぼそぼそと話す。しかし、言うことははっきりとしていて、意志の強さは感じられる。抑うつ的な雰囲気強い。その反面、家では普段、茶目っ気たっぷりに妹や母親を笑わせたりするという。

家庭の状況としては、父母、母方祖母、本児そして妹の5人家族であり、祖母は本児が2歳の時から同居している。父親(47歳)は高卒、会社員。仕事が忙しく、朝は早く帰りは遅い。出張が多く、10日くらい家をあけることもある。母親との会話の時間もあまり無い様子である。本児に対しては細かいことまで口うるさく言う。仕事第一で神経質な性格。母親(44歳)は、高卒、専業主婦。細かいことをくよくよと気にしてしまう。神経質で、どこかへ出かける時には下痢をしたりする。胃腸も弱い(本人にも同様の傾向がある)。祖母(67歳)は母親とよく似た性格。本児に対してはとても甘いところがある。妹(11歳)は活発で友人関係も良好である。好き嫌いがはっきりしていて、本児に対しても、はっきりとものを言うようなところがある。母親が妹と楽しそうにしていると本児が荒れる感じがある。父方の従兄(高校生)に精神分裂病のための精神科入院の経歴、そして、

母方祖父がうつ病で2、3年に一度は1、2カ月欠勤するという家族歴上の負荷がある。

乳児期はミルクを飲まず保育器に入っていた。2歳まではひきつけがあり、中耳炎、アデノイドの手術、脱臼、自家中毒と3歳から5歳までは大変だった。

学童期には頭痛、嘔吐がよくあった。よく遊ぶ子で、学校から帰ったら宿題をするようにしつけて下さいと言われる程であった。勉強は要領よくやる方だった。友人もたくさんおり、よく遊んでいた。しかし、感受性は強かった。近所の人たちからは、大人しいよい子であると言われていた。小学校2年次より近視がひどくなる。また鼻も悪くなる。そして、この時期から日常生活について食事やテレビ、歯磨きなどについて周りが口うるさく注意をしてきた。

中学1年次より反抗的になり、あまりしゃべらなくなった。また、ひどく疲れているのかぼおっとしていることがあった。クラブ(テニス)は一年の頃は励んでいたが、レギュラーになれず面白くなくなり、仲間と示し合わせてさぼったりすることがあった。先生に叱られて「帰れ」と言われると本当に帰ってしまうこともあった。

2年次では、体育委員長で準備運動などを朝礼台の上でする役目をしていた。その役目を終わり、また、かわいがっていた兎が死ぬなどのことがあって、それ以降から登校拒否が出てきた。すなわち、3学期より、何についてもやる気がしなくなり、学校へも行きたくなくなって、1月から半月以上休んだ。また、クラブも面白くなくなり、友人関係もうまくいかなくなった。しかし、担任が迎えに来るのがいやで、2月半ばから再登校。

3年次は4月に毎週月曜日、火曜日に休み、5月は半ばに少し休むという状況。成績は段々下がっていった。6月(インテーク時)は3日くらい休み、担任が朝迎えに行くと、それが嫌で自発的に登校。朝がなかなか起きられず腹痛のために帰ってきてしまうこともある。毎日毎日が積み重ねであるような充実感が持たず、また、やれば出来るのに自分の力を出しきっていない。そんな自分に対して強い自己嫌悪を感じ、家でゴロゴロしていると学校をやめてしまいたくなるという。

対人関係面では、親友と言えほどの友達はいないが、夏休みは誘い合って、プール、釣りなどに出かける仲間はいる。父親との外出は楽しみであるが、父親は忙しくなかなかできない。母親には甘えた態度が出てきている。また、週2回男子大学生の家庭教師が来ている。張り切って勉強を教えてくれる人で、勉強外でも外に連れだしてテニスをしたりする。本人もそういった誘いに対しては満更でもない反応を示している。

2. 面接経過

〔インテーク面接〕 6月13日

母親と来所した竹男は待合室で、むすっとした顔をしながら漫画を読んでいた。表情は暗く、常に眉をひそめているような緊張したかたさが感じられた。

面接室に入り一応の自己紹介を済ませた後、〈何か質問はないかな?〉と尋ねてみると、竹男はいきなり、

「先生はどうしてこういうところでこういうことをやっているの?」

と尋ねてきた。私は少し面食って、

〈それは、どういうことかな。説明してくれる?〉と聞き返した。すると竹男は、

「例えば、誰かに言われて、ここでやるように勧められたとか…」

とさらに言葉を加える。私はこの時点では彼が何を私に伝えようとしていたのか、また彼がどのような問題で困っているのかという点について理解できなかったのだが、特に彼の問いかけの気持ちを問い返すことをしなかった。私は自分が進路を選択していった経過について簡単に話すことで彼の問いに率直な答えを返していった。

また、竹男は、

「ここにはぼくと同じような人がたくさん来る?」と尋ねる。それに対して私は、
〈君のことよく知らないから、自分と同じような人とと言われてもよく分からないんだけど、少し君のこと話してくれないかな〉

と返してみた。すると竹男は、言葉を詰まらせながらこう言った。

「学校行かないとか、そういう…」

私は彼が初めて訪れたこの相談室のことを探ろうとしている感じであったので、相談室に来所してくる人たちの説明を簡単に説明した。このあたりから、彼は少しずつ緊張が解けてきたようで、ぼそぼそと自分自身のことを語り始めた。

竹男の語った話の内容は主として、「何に対してもやる気がしない」ということであった。彼は中学校2年生の3学期頃からクラブも面白くなくなり、また友人関係もうまくいかなくなると言う。

この後、竹男は近くにあったゲームをやりたいと言い出し、オセロやその他のゲームを私としながら時々ぼそと、

「家でごろごろしていると、学校やめたくなくなることがある」

などと少しずつ自分の気持ちを話してくれた。また、来所については〈少し通ってみる?〉という私の質問に対して、「そうする」と答えた。

〔第1回面接〕 6月26日

この回から面接場所は竹男の希望でプレイルームになった。竹男はダーツに興味を示し、時々やにや笑いながら一つ一つ丁寧に投げる。私は競争しないかと提案すると乗ってはくるもののあまりむきにはならない竹男であった。しばらく、静かに二人で野球ゲームをする。時間が来て終了を告げても、なかなか終わろうとしない。野球盤の後はトランポリンの上に乗って、ぎこちない跳ね方で飛び跳ねる。

「先生、ばく転できる?」

〈できないよ。竹男君できるの?〉

「できない。(にやにや笑い)」

竹男はこの回、私に向けて「先生は～できる?」という質問を幾度か投げかけていた。

〔第4回面接〕 8月6日

この回は今までのプレイルームが使えず、別の小さなプレイルームで面接をする。始めはいつもの野球盤ゲームであった。彼は今まで私に一度も負けたことがなく、「今日も絶対、勝つ」と張り切っている。私をとことん負かしてやろうという気持ちが見え見えであった。ゲームをしながら、竹男は夏の高校野球の話や好きなピッチャーのタイプの話をする。野球盤に勝って、満足した竹男はやがて真面目な質問を私に投げかけてきた。

「先生は中学のとき、どれくらい勉強した?」

「どうして、この大学を選んだの?」

「どうして、こういうことやろうと思ったの?」

「将来は何になるの?」

「先生にとって、勉強って何?」

竹男は私に対して矢継ぎ早に質問を投げかける。私は彼が自分自身が置かれている今の受験生という立場にかなり戸惑っているのだと感じていたが、彼の問いに対しては、「ぼくは君の頃はこうだったよ」という形で率直に答えていった。竹男は、熱心に私の話を聞いていたが、やがて次のように自分の現在の気持ちを語る。

「勉強やっても、将来何の役に立つか分からない。高校に入っても、それが何なんだろう。分からない」

「もし、やりたい職業があれば、高校行かなくてもいいんじゃないかなって思う。」

面接終了時間が過ぎていたために、この話題は十分に取り上げることができなかったが、私は、

「そういう今の気持ちとか、将来に対する不安とか悩みについて、もっともっと話し合っていけるといいと思うよ。そのもやもやとしたものが今の君にとって一番大切な問題なんじゃないかな」

と伝え、次回以降の面接に繋げていこうと考えた。竹男

はこの話をサッカーボールを蹴りながらしていた。どこか、私とまともに向かい合うのはいやだと感じていたのかもしれない。しかし、それも彼は彼なりのかかわり方で私に問いをぶつけてきて、その結果、「やっぱり勉強しなくちゃ駄目かなあ」という気持ちを抱き始めていたような印象も受けた。

帰り際、竹男は前回話していた「魁!男塾」の中の話が実話かどうか調べるにはどうしたらいいだろうかという話をしてきた。彼は私に調べてと頼むので、私は〈図書館で調べてみたらどうかな〉と自分で調べて私に教えてくれるように頼み返した。

〔第5回面接〕8月20日

夏休み期間中、最後の面接であった。待合室で母親と待っている竹男はいつものように、“むすっとした”顔をしていたが、プレイルームに入ると途端にくつろいだような顔をした。入るなり、ビニールバットを取り出してきて、甲子園で、応援していた地元の高校が敗退した話を残念そうにする。

彼の提案ですぐに野球盤ゲームが始まる。彼は勝ち負けにかなりこだわっており、「絶対に負けない。まけたら、大変」と意気込んでいる。途中接戦となり、あせりを隠せない竹男であったが、僅差で勝ちほっとして、満足そう。ゲームの途中、竹男は例のマンガについて、図書館に調べにいったことを教えてくれた。出不精の彼が遠くの図書館まで調べにいったことを聞いて、私は驚いてしまった。

野球盤を終えると、竹男はいきなり、

「先生、ぼく今日でここに来るの終わりにする。この2週間、浮き沈みの毎日だった。いつも一定していなくて、やろうかなあと思ったり、やる気がなくなったりしてた。今は昇っている感じで、頑張ろうという気持ちになってる。このままいけばいいと思ってる。もう、これからは勉強のことだけを考えようと思ってる。ほかのことは考えても仕方がないし。何か、吹っ切れたような気がする。これが自分なんだからって思った。良いところはあるはずだから、それはそのままにしておいて、悪いところは少しずつ良くしていけばいいって思う。先生なら、どうする?頑張る?」

私は竹男が彼なりに考えて決心したことを感じ、そのような決意を支持することにした。竹男は未練はないという感じで帰っていった。

第5回面接終了後、9月中は張り切って登校。しかし、10月に入ってまた登校しなくなった。10月中旬からは、毎朝きちんと起きる生活が始まり、家では絵を描いたり、料理を自分で作ったり掃除をしたりといった生活。勉強

はしなくてはならないという気持ちは強いが手につかない。そのため、10月末に母親から母親担当者のもとへ電話連絡がいき、11月から再開となる。

〔第6回面接〕11月7日

待合室でマンガを読んでいる。挨拶をすると照れくさそうに笑う。ダーツ、バスケットボールゲームの後、竹男の提案で野球盤ゲームを始める。野球盤をしていると、やがて竹男は、

「ねえ、大検って難しいの?」

と質問してくる。そして、彼は高校進学をやめて大検を受験しようとしていると語った。彼はこの進路の問題については、話したいと思うけれども、言葉がないと若干ためらいがちであったので、私は、竹男が自分で考えているよりは言葉で自分の気持ちを表現できる人間だと思っていると伝える。竹男は私の言葉を信じられない様子であったが、やがて吐き出すように数々の不満を語り始めた。

「日本人で働いてばかりでしょう。あれって、おかしいと思う。サラリーマンは毎日朝早く起きて、夜遅くまで働いて帰ってくる。その繰り返しばかり。何の楽しみもない。自分のしたいことはこういうことじゃないって、思っている、それを変えないでいる。みんな信念をもって働いているわけじゃない。学校だって同じ。何にも面白いことない。やりたいことも分からない。学校の生活って、毎日と同じことの繰り返し。小学校の頃からずっとそんな生活を繰り返してきた。たまに遅刻すると、それだけで何か違うなって感じる。一日が違うって、変化する。そういうことって、あるでしょう。」

〈うーん、なるほどね。〉

「でも、毎日単調な同じことの繰り返しで、高校行ってもきっと同じだと思う。勉強ばかりで好きなことが出来ない。こういうのは、間違っていると思う…。日本は学歴社会だから、みんな目的がなくても高校へ行ってる。信念をもって高校へ行く人はいない。大学に入るために高校へ行く人ばかり。自分はそういうのはいやだな。だけど、やっぱり大学は行きたいから大検にしようかって考えてる。結局、自分には合わなかったんだと思う。勉強押しつけられたりするの。」

〔第9回面接〕12月11日

この日、竹男は地下鉄の駅から母親と分かれて一人で歩いて相談室までやってきた。いつもはバスで母親と来所する竹男であるが、この日は一人で歩いて行くと母親に告げたいらしい。

竹男はいつものように野球盤ゲームを提案し、ゲーム

をしながら最近のニュースについて話を始める。彼の関心事は、当時話題となっていたINF（中距離核兵器）のことであった。そして、竹男はしきりに「ぼくは、戦争は絶対に起こると思う」と力説していた。また、彼は突然に幽霊の話をはじめた。

〔第10回面接〕12月25日

この回は、母親面接がなく竹男は一人でやってきた。プレイルームでは、いつものように野球盤ゲーム。前回、私に負けたのを覚えていて「今日は絶対に勝たないと」と意気込んでいる。野球盤を終えると、竹男はおもちゃ箱の中から、ビニールの刀を取り出してきて、「昔はよくこんなので面白がっていたなあ」と冷めたような口ぶり。竹男はそれでも、そのビニールの刀で剣道の真似をするので、そこから剣道の話が弾む。

「中学では厳しかったな。冬も裸足でさあ。うさぎ跳びとかして。先生の所ではしなかった？」

「<ぼくのところでは、高校で柔道か剣道をやったよ。>

「高校いったら楽かな？…ぼく、高校行けるかもしれないんだ。」

竹男は学校の先生が高校を捜してくれて行けるようになるかもしれないと説明する。しかし、竹男はその学校が宗教学校であるかもしれないこと、宗教はばからしいと思うこと、制服がネクタイでみっともないと思っていることなどを話してくれる。高校進学の可能性が出てきて、満更でもなさそうな顔をするものの、いろいろと理由をつけてはその学校をけなす竹男であった。

〔第11回面接〕1月8日

いつも以上に冗談を交わしながら野球盤ゲームを楽しんでいたが、やがて竹男はぼそぼそと高校の話始める。

「先生、ぼく、やっぱり高校行かないことにした。」

「<えっ、どうして？>

「学校行ってないから、やっぱり入れないって。」

「<そうかあ…それで、竹男君はどうするつもりなの？>

「大検を受ける。」

竹男が大検を受験したいと考えている理由は、高校卒業の資格が欲しいということが第一のようであった。また、大学には興味があり、楽で楽しそうだから行ってみたいという気持ちを持っていたようだった。私は彼が大検についてどのくらいの知識を持っているのか確認したが、彼はあまり詳しく知らず安易に大検ということを考えているような節も見受けられた。

〔第12回面接〕1月22日

竹男は入室後、すぐに野球盤をやろうと言う。この回の竹男はいつになく軽口を叩くようになり、二人で冗談を言いながら野球ゲームを楽しんだ。ゲームの最中に竹男は大学についての質問を色々出してきた。

「大学院って授業どのくらいあるの？」

「1回の授業って長いんでしょう？」

「G薬科大学（竹男の家庭教師の大学）って知ってる？あそこって毎日7時間くらい授業あるんだって。」

「<そんなに授業あるの嫌だなあ。>

「ねえ、そうでしょう。先生も嫌でしょう。」

私は竹男に大学に興味があるのか尋ねると、面白そうだと思うと答えた。しかし、彼の大学への興味は勉強を離れたところでの興味であるようだった。また彼は私に、

「大学院って何年なの？先生は何年？留年してるの？」などと質問を出してくる。私は彼に「<竹男君も大学院どう？>と勧めてみると、彼は

「いやだよ。だって勉強押しつけられそうじゃん」と答えた。私は彼に「<勉強を押しつけられることが嫌なんだね>と聞くと、そうだと答えた。彼にとって高校はそのような勉強の押し付けの場に映っていることも語られた。

〔第13回面接〕2月5日

プレイルームに入室すると竹男はすぐに、廊下ですれ違った子供について、「あの子どもどうして来ているの？」と尋ねてきた。私は本人か両親が何か困ったことがあってやってきたんじゃないかなと答え、逆に「<どうして？気になるかな？>と聞き返した。竹男は「別に」とそっけないので、私はさらに「<ねえ、竹男君はどうしてここに来ているの？>と尋ねてみた。竹男は言葉を詰まらせて、

「うーん、別に…。野球盤やりになあ」と答えた。私は、ここではどんなことをしても良いことになっているんだけど、自分自身でここへ来ていることについては考えておいて欲しいなと伝えた。私は更に、竹男はどんなことがしたかったのかについて尋ねてみた。すると、「別に何もやりたいことはない。一番野球盤が面白い」

と答えた。私は、「<他には何か好きなこととか、やりたいことはなかったのかな>と尋ねると竹男は「何もないな、特に」と答えた。しかし、突然にこう言う。「やっぱり、自信がないのかな。」

「<自信がないって？>

「いや、楽しいものがないのはさあ。」

竹男はこれ以上話さなかった。竹男は話題を変えて、次に物理学の話から、ロケットと宇宙の話始める。家庭教師の先生に聞いた話である。私が「君が生きているうちには、宇宙に行けるようになるんじゃないか?」と言うと、竹男は

「駄目だよ。それまでにきっと核戦争が起きて、みんな死んでしまうよ」

と言う。私は戦争が起きそうで不安なのかと尋ねると、彼はそうではないがそんな気がするのだと答えた。

〔第15回面接〕3月4日

前回、野球盤ゲームに負けたために、「今日は勝つぞ」と張り切っている。野球盤をしながら、いつものように話を始める。この日、竹男は進路についての報告してくれた。

「大検に決めた。塾も二つ行ってきたんだよ、ひとりで。親と来ている人が一杯来てたけどね。」

「へえ、そおかあ。一人で行って来たの?偉いね。」

「そんなことない。良い子はこんな所に来ないもん。このまま家におっても仕方がないから…」

私はさらに詳しく塾(予備校)の話を知ろうと思ったが、竹男は野球の方に熱中していたせいもあって、それ以上は話してくれなかった。

また、竹男は野球をしながら、

「こんなので遊んでいて恥ずかしいことない?」

と私に聞いてくる。私は、別に恥ずかしくはない、楽しいと答えた。竹男は私とこうしてゲームで遊んでいたり、時には全く子どもじみた遊びをすることが自分自身で恥ずかしく思えてきたのかもしれない。また、大人である私がゲームを楽しんでいる姿が、見ていて恥ずかしく思えてきたようでもあった。

さらに竹男は私に、「他の子とは、こんなことしているの?」と聞いてきた。

〔第16回面接〕3月18日

竹男の申し出により最終日となった回である。この日、竹男は母親とは別に朝早く一人で家を出て、4月から通うことになるかもしれない予備校に寄ってから相談室にやってきた。入室するとすぐ野球盤を取り出してきて、「今日は勝つぞ」と意気込んでいる。座り込むとすぐに予備校の話始める。

「ぼく、4月から大検のK予備校か、もう一つTアカデミーのどっちかに行くことにしたんだ。だから、ここにカウンセリング受けに来るの今日でやめる。」

「ぼく、ずっとこんなだったから4月から何とかしたいなあって思って。K予備校もTアカデミーも高校と

は違う感じだから…」

竹男の説明では、K予備校では芸術関係のユニークな授業があるらしく、またTアカデミーも授業形態が変わっているということだった。どちらも普通の高校とは違ってユニークであることが竹男にとっては魅力的に映っていたようだった。竹男はどちらにするかは迷っているが、時間はまだあるからと慎重であった。

また、竹男は尋ねる。

「先生、ぼくここへ来て変わったと思う?」

「君は自分でどう思うの?」

「よく分からない。あまり変わっていないような気がする。先生はどう思う?」

「うーん、そうだねえ、前にね、夏休みで終わりにしたことあったでしょう。あの時は何か頑張りすぎているかなあっていう感じしていたんだけど。今は、ちょっと違うね。学校のことも自分で決めたことみたいだし、少し変わってきたように思うけどな。」

「あの時は、夏休みの補習も行けたし、自信があったんだけど、今は自信ない。」

「うーん、自信がなくなっているんだね。」

「でも、今は自信はないけど、そんなに心配もしていない。やっぱり、今までずっとこうだったから、自分で決めたことだし、責任はとらなくっちゃという気がしている。自信はないんだけど、大検受かれば自信もつくような気がする。ずっと、高校の数学やってたし…。高校は中学と同じでつまらないと思った。毎日、学校へ行くのも向いてないなって感じてた。受験勉強は嫌じゃなかったんだけど。」

竹男は4月からの生活について不安だったようだ。彼は自分自身の変化を確認して自信を持ちたかったのかもしれない。私は、竹男にさらに尋ねてみた。

「ここへ来て、何か役にたったと思うことはないかな?」

「うーん、ずっとここに来るの嫌だったけど、最初はずっと行かされてきた感じがしてたんだけど。夏休み終わってから来た時にはそんな感じではなくなった。…外へ出て、ここまで来ることが何か練習になったような気がする。今日も一人でK予備校に行ってこれたし。…先生、やっぱり、そう思う?(うん?)自分で決めることって大切かなあ?」

「うん、自分の決めた道を大切にしたい方がいいと思うな。悔いのないようにね。君はどう?」

「やっぱり大検は自分で考えたことだから。お父さんも、お母さんも好きなようにやっていいって言ってるから。」

野球盤ゲームをしながらの話であったので、話が途切

れ途切れになってしまうことが多かったが、竹男なりに自分の不安な気持ちを整理しようとしていたようだった。私は彼が自信がないのだなと感じていたので、なるべく励まして送り出したいと考えていた。

野球ゲームでは「最後だから勝つぞ」と張り切っていた。途中、当時話題を呼んでいた『危険な話』という書物の話を熱心にする。それは現代の原子力発電所の危険な状態について書かれたものである。竹男は、

「東海大地震とか、いつかくるでしょう。そしたら爆発するかもしれないよ。やっぱり、日本はいつか核でやられるよ。どうせ、みんな死んじゃうんだよ」などと話す。

しかし、ゲームを勝って終わった後、竹男は最後の得点を黒板に書きに行く。勝ちを決めて、とても満足そうであった。

3. 考察

1) 家族関係について

竹男と家族との関係に関しての問題であると考えられる点は、第一に周囲の神経質で干渉的な養育態度である。このような周囲の態度を引き起こした原因としては、竹男が幼少期より病弱であったことが挙げられる。しかし、別の理由としては竹男が第一子の長男であったために「大切に育てたい」という気持ちや期待などが祖母を含め家族全体にあったことも考えられる。竹男が面接（第6回面接と第12回面接）の中でしばしば語っている「押しつけられること」は、彼が長い間感じてきた周囲からの期待という圧力であったとも考えられる。

第二の点としては、父親不在の問題が挙げられる。父親は仕事が忙しく、家庭には不在であることが多かった。その上、養育態度としては母親と同様な干渉的態度をとってしまい、その結果、家族全体に父親原理を存在させなかった。このため、母親との固着を厳しく断ち切り、子どもを次の発達段階へと促進させる機能が作用しえず、竹男は母親や祖母に取りこまれたまま、そこから離脱して友人関係の中へと入っていくことができなかったものと考えられる。

第三の点としては母親の抑うつ気分と身体反応がある。竹男は、抑うつのすぐ後に身体的反応を示す母親に対しては、まともに体当り的にかかわってはいけない関係を作っていたと推測される。そのために、竹男は真綿で首を絞められるように縛りつけられ、同時にそれに対する抵抗も示せぬまま思春期を迎えたようだ。竹男は両親とぶつかっていくことで、自分自身の力の確認をすることが出来ず、身体的にも不確実感を抱き続け、自己イメージを固めていった。そういった竹男の自己への否定的な

意識はうつ的气氛で表わされているが、それは母親がとっているのと同様の反応となっている。

2) 基本的問題

竹男はインテークにおける最初の問い、すなわち「先生はどうしてこういうところでこういうことをやっているの」を初めとして、さまざまなことについてくりかえし「先生はどうか」ときいてきた。彼にとっては、ほかの人のことやその気持ちがよくわからないということが基本的に問題であった。それは「誰でもこういう時にはこうするものだ」という自明の実践感覚としての「共通感覚—常識」が希薄であることを物語っていた。この「誰でも」「誰にとっても」という、特定の誰それを越えた超越的他者一般性が「Auchsein」性ということにほかならないから、彼にとってこの Auchsein 性の問題化が中核にあることは明らかであろう。また、彼にあってこうした自明の実践感覚が十分なものではないことは、クラブの先生に叱られて「そんなことなら帰れ」といわれると本当に帰ってしまったたり、漫画の話と現実の区別がつかなくなったりするところにもあらわれている。

同時に、彼にとっては「どうして勉強しなくてはならないのか」「どうして学校に行かなくてはならないのか」ということ、そのほかすべての自分自身の行動の意味が疑問になっていた。みんなも自分からすすんで「目的」や「信念」をもって勉強したり働いているようには見えない。毎日同じことの繰り返しで、何一つ面白いことはない。（このようにしか感じとれないということ自体、何よりも彼の生命的流動的生成が停滞していることの反映である。）それにもかかわらず、みんなは相変わらず学校に行き、勉強している。そこがわからない。他者の Auchsein 性が問題化するということはそのまま、自己が遊離するということである。こうしてもはや竹男は無邪気に他者の中に入っていくことができなくなる。彼は自分自身への嫌悪感と不確実感を強め、「何もしたくなくなり、クラブも面白くなく、友人関係もうまくいなくなり、学校も行きたくなくなって」登校拒否の状態に陥ったのであった。すなわち、「ヨコ関係」の中へと参加していくことに挫折したのである。

3) 治療論的示唆

この治療関係について治療者は全体的にぎこちなさと深まらないという印象を抱いていた。それは、体当たりできない竹男の問題と、治療者が言語的な部分での面接を期待しすぎていた点、竹男が連れられてきたという意識を抱いていたことに気づいていなかった点などの相互作用の結果であったと考えられる。

しかし、ここでは問題を竹男の「自分と他者についての意識」に限定し、竹男が治療関係の中でどのようにそれを整理していったかについて考察していきたい。

竹男は初回から治療者に自分自身の本質的課題をぶつけてきている。「先生はどうして…？」がそれである。また、「ここはぼくと同じような人がたくさん来る？」も同様である。竹男は「自分と他の人と違うのだろうか、自分と同じ気持ちを抱いている人はいるのだろうか」という疑問を強く抱いていた。そして、それゆえ、目の前にいる治療者がどのような人物であるかを確かめようとしたのだろう。竹男と同じ人であるのかどうかを。治療者の答えは、「ぼくはこうだったよ」というごく当り前の答えであった。竹男にとって治療者は「自分と他者」との間に立つ人間、あるいは他者を代表する人間であったと考えられる。第4回で竹男が治療者に問いかけた疑問、「先生は中学のとき、どれくらい勉強した？」は竹男が「ヨコの関係」の中で感じている違和感を整理し、その中に入って行こうとするための問いであったかもしれない。治療者は「ぼくはこうだったよ」と返すが、それに対して竹男は「やっぱり勉強しないといけないな」という気持ちになっていったようだった。これらはまさに、Sullivan のいう consensual validation の意味をもつものにほかならない。第5回において竹男が治療を終ろうと決意したことは、「違和感を抱いているヨコの世界に思い切って飛び込む決心」であったように考えられる。そこでは、治療者が「ヨコ関係」への橋渡しの役割を持っていた。

治療再開後の竹男は、「押しつけられてきた自分」、「みんなと一緒にほしくない自分」を言語化するようになってくる。日本の学歴社会にたいする批判は押しつけられることに対する抵抗であり、それは両親に対する抵抗の課題と同一のものであったと考えられる。

竹男は自分が「人と違う道を行きたい（高校へは行きたくない）」という気持ちと「人と同じようにしたい（学歴はほしい）」という気持ちの間で揺れていたようだった。竹男の持つこの葛藤は、治療者と家庭教師への同一視によって解決されようとしていた。つまり、大学への興味である。竹男は決して押し付けられることはない大学を望んだのである。しかし、大学への道のりである高校については、やはり「人と違う」大検を選ぶことになった。

治療関係では、竹男は治療者にしきりに大学についての質問と治療者自身の進路選択の質問が出される。治療者は具体的な質問に対して具体的な答えを返していくことと同時に、その疑問の背後にある竹男の感情を言語化させていこうとした。しかし、竹男は第16回（最終回）

で述べているように、治療者の中から「自分で決めていくこと」という自立性の部分を同一視していったようだ。

以上考察してきた治療経過をまとめると、竹男の本質的な問題は家族関係（タテ関係）の課題が未解決なために、「ヨコ関係」の中で他者に同一視したり、自己を位置づけることが出来なかったことであったと考えられる。この「ヨコ関係」の中に自分を埋没させ、その中で安心感を得ることは、自分と他者は基本的に同じであるという感情（Auchsein 感覚）によって可能となる。しかし、竹男の場合は「タテ関係」での課題が未解決であったためにこの Auchsein 感覚を得られない自分を意識していった。

竹男は、「自分と（ヨコ関係における）他者とは違う」という感覚と「自分と他者とは同じ」という感覚の混乱が問題となっている。竹男は、Auchsein 感覚を得られず、そのために「自分は他者とは違いたい」という感情を抱き始めたようだ。治療論的に重要であると考えられるのは、「同じである」感覚を得られないことと「違いたい」という意識との間の統合をはかることではないだろうか。発達の観点からすれば、「他者と違う自己」を確立するためには、「他者と同じ自己」の感覚（Auchsein 感覚）を前提にする必要があるからである。竹男の場合は、「他者と同じ自己」の感覚を基盤に得られていないために、防衛的に次の課題へスキップしてしまったと考えられる。

したがって、「先生は…どうだった？」という問いに関して重視しなければならないのは、この問いに含まれている Auchsein 感覚の欠如から来る不安とそれに対する防衛を治療者が十分に理解することである。そして、治療関係においては、治療者を「ヨコ関係」への中間的立場（橋渡しの役割）を得ることによって、Auchsein 感覚を育てていくことにあると考えられる。そのための方法の一つとしては、それらの問いに対して「普通の人」の代表として治療者が積極的に自らのことを胸襟を開いて語る態度が必要となり、それによって治療者への同一視を高め、Auchsein 感覚を促進する効果が得られると考えられる。

IV. 要約

共通感覚（common sense）とは、Blankenburg, W. (1971) が「自然な自明性の喪失」としての分裂病問題を検討するに当たって明細化した概念であるが、登校拒否者の家族においても、分裂病家族におけるほどではないにしても、やはり同様に共通感覚に欠ける点が問題となる（池田ほか、1980）。家族関係において共通感覚が不十分であると、そこに育つものは、他者一般、社会

一般、自明性の世界に、つまり、それは水平軸の意味方向をもつものであるから、簡単にいければヨコの関係の中へと、入っていくことが困難になる。共通感覚不全というあり方自体は、青年期危機一般を特徴づける本質的要因であって、その症状次元の具体的なあらわれは色々でありうるが、とりわけ、児童期から青年期への種々な段階で、タテ関係に拘束されてヨコ関係への参加に挫折した姿の前景化した事態が、登校拒否であると考えることができる。

Common sense が希薄であるということは、同時に、Auchsein 性、すなわち自分も他者も根本的にはやはりまた同じ人間だという感覚も不十分となることを意味している。ひとりひとりの人間が個性をもち、ちがっているというのは当然であるが、まったく別人でありながら、しかし基本的には同様の人間だという感覚は「基本的信頼」に通ずることがらであるから、「決定的に自分はひととはちがっている」とか「ほかのひとの個人的な生活や本音の部分はまったくわからない」といった形で示されるこの感覚の問題化は、非常に深刻な存在論的懷疑、ないしは基底欠損的不安となるのである。それゆえ青年期危機としての病理が深いほど、この点が問題化する。登校拒否においては一般に、症状次元の問題はおもに行動化として示され、そのこと自体が心理的過程として自覚されることは必ずしも多くはないけれども、よく注意してみると、「自分は普通と違う、常識というものがわからない」といった密かな隘路が底在していることも少なくないことがわかる。

Auchsein 感覚不全によるヨコ関係参加への挫折という事態は、児童期、前青春期、青年期の各発達段階において多様なあらわれかたをするが、われわれの視点は、各発達段階におけるさまざまなタイプの登校拒否をできるだけ包括的、統合的に理解しうる説明原理を提起することになると考える。

本論の目的は、以上のわれわれの定式化を若干の事例の中で検討することにあつた。われわれの視点から、具体的な事例をどれだけ説明しうるかによって、われわれの定式化の有効性が検証されるであろう。

事例 1 では、おもに Sullivan の理論を援用して、児童期と前青春期の問題をとくに誘因的事態に重点をおいて検討した。彼もまた、われわれのいわんとするところを別の言葉で見てとっていたのではないかと考えられた。

事例 2 では、生活史的形成の視点から、家族歴的にタテ関係優位の呪縛の中でヨコ関係に入りそこねたケースの理解が示された。

事例 3 は、Auchsein 性の問題を自覚的に示したケースであり、ここではとくに治療論的示唆が与えられた。すなわち、治療論的には、ヨコ関係への関与を積極的に支えるとともに、例えば「先生は僕の頃、どうだった」というような質問に際して、率直に胸襟を開いて語ることなどによって、Auchsein 感覚の経験を促進することが重要となる。

以上の検討において、われわれの視点が有効妥当なものであることが示されたと考える。

文 献

- Blankenburg, W. 1971 *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit; Ein Beitrag zur Psychopathologie symptomarmer Schizophrenien*. Ferdinand, Stuttgart. (木村敏ほか訳 1978 自然な自明性の喪失 —— 分裂病の現象学 —— みすず書房)
- Blos, P. 1962 *On Adolescence; A Psychoanalytic Interpretation*. The Free Press of Glencoe, N. Y. (野沢栄司訳 1971 青年期の精神医学 誠信書房)
- 池田博和, 伊藤義美, 江口昇勇 1979 臨床青年心理学研究 IV —— 女子症例に関する諸報告 —— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科) 26, 77-93.
- 池田博和, 間宮正幸, 生越達美 1980 臨床青年心理学研究 VI —— 7年間にわたった登校拒否と家庭内暴力を克服した青年 —— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科) 27, 99-113.
- 池田博和, 長谷川博一, 平石賢二ほか 1987 登校拒否に関する研究 第 I 報 —— 最近の来談者の諸傾向についての調査研究 —— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科) 34, 255-291.
- Sullivan, H. S. 1953 *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. Norton, N. Y.
- Sullivan, H. S. 1955 *Conceptions of Modern Psychiatry*. Tavistock, London. (中井久夫・山口隆訳 1976 現代精神医学の概念 みすず書房)
- 田畑 治, 生越達美, 間宮正幸ほか 1979 臨床青年心理学研究 III —— 男子症例に関する考察 —— 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科) 26, 55-75.
(1988年8月31日 受稿)

ABSTRACT

A Study on School Refusal (II)

— School Refusal as a Breakdown in Development
from Vertical Interpersonal Relationship to Horizontal One —

Hirokazu IKEDA, Masako KIRIYAMA, Kenji HIRAISHI, Masayoshi ISHIKAWA,
Hirokazu HASEGAWA, Masatsugu JSUJII, Masahiro KAWASE, Reiko KATO and Noriko TOURA

Common sense is the concept that Blankenburg (1971) elaborated on, examining the problems of schizophrenia as a type of loss of natural self-evidence. Likewise, the same can be said of those characterized by school refusal (Ikeda, et al., 1980). If common sense were to be insufficiently developed through family relations, it implies a lot difficulty in merging into horizontal interpersonal relationships (eg. friendship) in lieu of the fact that such deficiency lies on a connotative horizontal axis with the world of others, society and self-evidence. The inadequacy of self-evidence, we assert, constitutes an essential factor in adolescence crisis in general. We also view school refusal as a state at various stages of childhood and adolescence, that is bounded by vertical relationships (eg. parent-child) and that is characteristic of a breakdown in participation into horizontal relationships.

The inadequacy of common sense suggests a concurrent condition of a lack of “Auchsein,” that is, the lack of a sense that ones self and others share the same basic existence as human beings, despite the fact that each has distinct personality traits and is unique as a person. Such inadequacy may lead to a severe case of existential skepsis or a basic fault-like anxiety. The matter becomes complicated through adolescent crisis, in that the more extensive the pathologic signs, the greater the problem. Generally, in the case of school refusal, the symptoms appear in the behaviour of the subject, but not often can we recognize this in his psychological process. However, when observed carefully, signs can be seen in his confessions such as; “I am not ordinary because I do not understand what is common sense.”

Failure in participation in horizontal relationships that is due to this Auchsein sense inadequacy has diverse forms in the various stages of development from childhood to adolescence. Our perspective, then, shall be one that focuses on a comprehensive and an integrative categorization of the types of school refusal through the developmental stages.

The purpose of this study was to examine the above formulation through several case studies in order to verify it.

In case 1, H.S. Sullivan’s theory was applied to the inducing factors of school refusal during childhood and pre-adolescence. Case 2 examined the dominating effect of the vertical family relationship in discouraging entrance into horizontal relationships, from a life-historical viewpoint. Finally, therapeutic suggestions were drawn from case 3, in which the subject was conscious of his Auchsein sense problem. In other words, therapy can be done through facillitation of involvement into horizontal relationships, and frankly responding to such inquiries as, “How were you when you were my age,” all with the purpose of promoting Auchsein sense experiences.

With the above investigations, we believe that our insights have been validated to a satisfactory degree.